

よろずは

平成二七年

七月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

年わたる
までにも人は
ありといふを
何時の間にそも
わが恋ひにける

万葉集 卷十三―三二六四 作者未詳

【意訳】

一年にわたつてまでも人は耐えていられるというのに、
私はいつの間に恋に苦しみはじめたのだろう。

引き裂かれた恋人たち

一年ものあいだ恋の苦しみに耐えていられる人、とは彦星
(牽牛)を指すと考えられています。よく似た歌に

よく渡る 人は年にも ありとふを 何時の間にそも

わが恋ひにける

(巻四―五二三番歌)

もあります。織女と牽牛が一年にたった一度、七月七日にだけ逢えるという切なくも美しいお話は、元々中国の伝説でしたが、古代日本の人々にも好まれたようで、『万葉集』には七夕歌が百首以上も載せられています。

この歌は長歌(三二六三番歌)と一組になっていて、長歌では泊瀬川での神事の様子を描写しつつ、妻への思いが詠まれています。『古事記』では木梨軽太子が自ら命を絶ったときに作った歌だという、との注が長歌にだけ付けられています。

『万葉集』では七夕を連想させる表現の短歌とともに、妻への思いを詠んだ歌として、『古事記』では禁じられた恋に身を滅ぼした軽太子伝説のなかの長歌として、それぞれに記録されたとみられます。

【万葉古代学係】